

平成艸紙



おりおりの記

美術館にミステリーはよく似合う

大原美術館
館長

高階 秀爾

ミステリーの世界では、美術品を主題とした作品が少なからずある。

もともと優れた美術品は、愛好家の収集欲を刺激し、時には驚くほどの高額商品として取引の対象となる。それだけに、名画をめぐる盗難、破壊、詐欺などの犯罪が後を絶たない。そこがミステリー小説家の腕の扱いどころとなる。

二年ほど前、原田マハさんの『楽園のカンヴァス』という小説が評判を呼んだ。山本周五郎賞を得たこの作品は、血なまぐさい事件が起きるわけではないが、名画(?)の謎を中心に据えた本格ミステリーとして上出来のものである。私にとって特に興味深かったのは、倉敷の大原美術館で監視員を務める女性が主役を演じるという設定になっていることであった。物語りはむろん架空の話だが、原田さんはかつて美術関係の仕事に携わっていた経験もあるので、一般の観客には眼につきにくい美術館の裏方の苦労や、展覧会企画にまつわる業界の事情なども、なかなかリアルティがある。ちょうど、ルーヴル美術館を舞台としたダン・ブラウンのベストセラー小説『ダ・ヴィンチ・コード』が映画化されて大きな評判を呼んでいた時期であったので、取材のため大原美術館を訪れ

た原田さんに対して、職員が「うちの館長はどの絵の前で殺されるのですか」と質問したという。

幸い私は殺されずにすんだが、そればかりではな

く、これはたしかに実在する大原美術館所蔵の名品、グレコの「受胎告知」やピカソの「鳥籠」なども登場していて、好個の美術館案内にもなっているの、私は大いに楽しんだ。

物語りの中心テーマは、ニューヨーク近代美術館にあるアンリ・ルソーの名品「夢」（これは実在する）に酷似したもう一点のルソー作品（これは架空）の真贋をめぐって日本とアメリカの専門家が鑑定腕くらべをするというもので、謎が謎を呼ぶ思いがけない展開は、息をつがせない。

そうではなくても、実際に美術館に収まっている作品には、つねに多くの謎が含まれている。美術館にミステリーはよく似合うのである。

